

1

まじめな雨をずいぶん落としたので
疲れ切って 軽くなってしまつて
空

すなわち攪拌された期待の

遠すぎるところに 今は

微かになつてしまつている雲よ

ぬれたものは いつときでも

光ることができた

4

2

春だ 風が

あちらの窓 こちらの窓に

まっくらな光を

生みつけてゆく

5

孵るものよ

そして

還るものよ

3

一羽の小鳥が

いちばんてっぺんの細い枝先にとまって声を震わす
五億年後と共鳴している
十億年前を通訳している

4

死んでみなければ
わからないことがあるのか
生きていることは
それゆえの口惜しさなのか

5

時計の音のひとつひとつに猛毒の匂いがある

6

その開闢の瞬間から
宇宙は無限に殺しなおされてきた

7

6
声が折れて がくと君はひざまずく
夜ひとつ分が心にはまりこんでしまったような
巨大な 立ちくらみ だ

7

窓が私を見ている

鳥が過ぎり

太陽が潰れ

雲のためいきがかける

いま 窓を開けるものの気配がする

同時に

私は開けられる

私のなかにひろがっていく外

宇宙より広い外を

窓は 見たがっている

8

薄曇りの日

8

泡のようなおしゃべりを舞い散らかせてゆく 少女らの
その背のなぜか 老いて見える

9

9

蠟燭のほのおを見よ

闇は周りからさわさわと寄せてきて

舟のかたちをした炎のふるえるへりで

ふっと溶けて 消え

消えては 小さな明るみを補いひらく

開きつづける

あなたのいのちも虚空に浮かびつづける

このように 死を食べながら

10

遠く 地平 または

水平線の 彼方の かすかな 何かを

感じて ふりむく

のではない

ふりむくことによって

遠く はるかに

茫々と

ひろがってくるものを

地平 または 水平線

10

と呼ぶのだ

11

11

紫陽花は 大地が

曇天に向かって吊したシャンデリアだ

めざめては 鬱血気味に点き

ねむっては 紫煙を放って消えてゆく

12

さびしい が 雲にもたれている

かなしい が 雲によごれている

11

さびしいかな のようにもたれている
かなしいさび のようによごれている

あかるい は 雲を飼っている

あかるい の なかの かるい 雲は

あおあおとした笑顔が大好きで

明日

ばっかり食べている

13

静かな雲

世界中を隅から隅まで黙らせてしまうような

高くも低くもない

濃くも薄くもない

どこか別の星の空から

いつのまにか 滲み出してきたような

14

笑うということは

建てておいたものを

突然 倒すということだ

水のひびわれる音